

曾根崎心中

付り観音廻り

作者近松門左衛門
なやま辰松八郎兵衛

眞實にや安樂世界より。今此の娑婆に示現して。我等が爲の觀世音仰ぐも高し。ハルハ高き屋に。登りて民の賑ひを。契り置きて難波津や。ステテ三つづつ十と三つの里。札所々々の靈地靈佛オツリ廻れば。罪も夏の雲暑くろしとて駕籠をはや。おりはの乞目三六の。十八九なるかほよ花。フシオクリ今咲き出しの。初花にハルフシ笠は被ずとも。召さずとも。照日の神も男神。よけて日まけはよもあらじ。頼みありける願禮道。西國三十三所にも。オツリ向ふと。聞くぞ有難き。願禮一番に天満の。大融寺。此の御寺の。名もふりし。フシ昔の人も。氣のとほるの。大臣の君が。鹽竈の浦を。都に堀江溝ぐ。汐波舟の。フシあと絶えず。今も弘誓の繪拍子に。のりの玉鉾歌ふい。大阪順

禮胸に木札の。普陀落や。大江の岸に打つ波に。フシしらむ夜明けの。とりも二番に長福寺。地空にまばゆき久方の。光にうつる我が影のあれく。走れば走るこれく又。とまればとまる振のよしあし。フシ見る如く。心もさぞや神佛。照らす鏡の神明宮。拜み廻りて法住寺。人の願ひも我が如く。誰をか戀の祈りぞと。仇の格氣やフシ法界寺。地東は如何に。大鏡寺草の若芽も春過ぎて。後れ咲なる菜種や罌粟の。露にやつる。夏の蟲。己が妻戀ひやさしやすしや。あちへ飛びつれ。こちへ飛びつれ。あちやこち風ひたくく。翅と翅とをあはせの袖の。染めた模様を花かとして肩に止れば自ら。紋に揚羽のフシ超泉寺。さて普導寺栗東寺。天満の札所残りなく。其方に廻る夕

立の雲の羽衣。蟬の翅の薄き手拭。暑き日に。貰ぬく汗の玉造稻荷の宮に迷ふとの。闇はことわり御佛も。ステテ衆生の爲の親なれば。これぞ小橋の興徳寺。四方に眺の果しなく西に船路の海深く。歌波の淡路に消えずも通ふ。沖の汐風。身にしむ鷗。汝も無常の煙にむせぶ。色に焦れて死なうなら。しんぞ此の身はなり次第。さて。けによい慶傳寺。フシ縁に引かれて。また何時か。ここに高津の遍明院。菩提の種や上寺町の。長安寺より誓安寺。上りやすなく下りやちよこく。ハルフシ上りつ下りつ谷町筋を。歩み習はず。フシ行き習はねば。所體くづをれア、恥かしの。もりて裳裾がはらくく。はつとかへるを打ちかき合せ。ゆるみし帯を引締め。くく。しめてまつはれフシ藤の棚。十七番に重願寺。これからいくつ生玉の本誓寺ぞと伏し拜む。數珠に繋がん菩提寺や。はや天王寺に六時堂。オツリ七千餘卷の經堂に經よむ西の時ぞとて。餘所の

待宵後朝も。思はでつらき鐘の聲こん。金つ。手に揃ひあけ口嗽ぎ無明の酒の酔さま
 堂に講堂や萬燈院にともす火は。影もかす。木々の下風。ひやくくと右の袖口左の
 やく蠟燭のしん清水にへ暫しとて。フシや袖へ。通る煙管に燃る火も。道の慰みあつ
 がて休らふ。逢坂の關の清水を汲みあけからす。オカリ吹きて亂る、薄煙、フシ空に消

若狭の舟 辰松八郎吉兵衛



えては是も亦。行方も知らぬ。相思ひ草。人しのぶ草道草に。日も傾きぬ急ぐんと又立出づる雲の脚。時雨の松の下寺町に信心深き心光寺。悟らぬ身さへ大覺寺さて金臺寺大蓮寺ハツメのぐり。く。て。フシ是ぞはや。ハルツ

シ三十番に。三津寺の大慈大悲を頼みにて。かくる佛の御手の絲。白髪町とよ黒髪は戀に亂る。妄執の。夢をさまさん博勞の。こも稻荷の神社佛神水波のしるしとて憂な
 らべし新御靈に。拜みをさまるさしも草。草の蓮葉な世にまじり。三十三に御身を變へ色で。導き情で教へ。戀を菩提の橋となし。渡して救ふ觀世音誓は。妙に三三へ有難し立迷ふ。フシ浮名を餘所に。漏らさじと包む心の内本町。焦る、胸の平野屋に春を重ねし雛男。一つなる口桃の酒。柳の髪もとくくと。フシ呼ばれて粹の名取川。埋今は手代と埋木の。生醬油の袖したる。戀の奴に荷はせて。得意をめぐり生玉のオカリ社に。こそは着きにけれフシ出茶屋の床より。地女の聲ありや徳様ではないかいの。コレ徳様くと手を叩けば徳兵衛。合點して打領き。詞コレ長藏。俺は跡から往の程に。そちは寺町の久本寺様長久寺様。上町から屋敷がた廻つてさうして内へ往に

たは譚があろ何故打明けては下んせぬと。膝にもたれてさめくくと、フシ涙は、延紙をひたしけり。ハアテ泣きやんな恨みやるな。隠すではなけれどもいうても埒の明かぬ事。さりながら大方先づ濟みよつたが。一部始終を聞いてたも。俺が旦那は主ながら現在の叔父甥なれば懸にもあづかる。又身どもも奉公にこれ程も油断せず。商ひ物も文字半錢違へた事のあらばこそ。此の頃給をせうと思ひ埒筋で加賀一疋。旦那の名代で買ひがかる是が一期にたつた一度。此の銀もすはといへば着替賣りても損かけぬ。此の正直を見て取つて、内儀の姪に二貫目つけて女夫にし。商賣をさせうといふ談合去年からの事なれど。其方といふ人持てなんの心が移らうぞ。取りあへもせぬ其の内に在所の母は繼母なるが。我に隠して親方と談合極め二貫目の。銀を握つて歸られしを此のうつそりが夢にも知らず。跡の月からもやくり出し押しして祝言させう

とある。そこで俺もむつとして。調やあら聞えぬ旦那殿。私合點致さぬを老母をたらした、きつけ。餘りななされ様お内儀様も聞えませぬ。今迄様に様をつけ崇へた娘御に。銀をつけて申し受け一生女房の機嫌とり此の徳兵衛が立つものか。いやといふからは死んだ親父が生きかへり申すとあつても。いやで御座ると言葉を過す返答に。親方も立腹せられ。俺がそれも知つてゐる。蜷川の天満屋の初めとやらと腐り合ひ。嫁が姪を嫌ふよな。地よい此の上はもう娘は遣らぬ。やらぬからは銀をたて。四月七日迄にきつと立て商の勘定せよ。まくり出して大阪の地は踏ませぬと怒らる。某も男の我ヲ、ソレ畏つたと在所へ走る。又此の母といふ人が此の世が彼の世へかへつても。握つた銀を放さばこそ。京の五條の醬油問屋常々金の取り遣りすれば。是を頼みに上つて見ても折しも悪う銀もなし。引返して在所へ行き一在所の詫言にて。母より銀を受取つたり。追付け返し勘定了ひさらりと埒が明くは明く。されども大阪に置かれまい。時にはどうして逢はれうぞ假令ば骨を碎かれて。身はしやれ貝の蜷川底の水屑とならばなれ。汝が身に離れどうせうとステテ咽び。入つてぞ泣き居たる。フシお初も。共にせく涙。地力を付けて押し止め。扱々いかい御苦勞皆私ゆゑと存すれば。噫し悲しう。フシ忝し。さりながら心たしかに思召せ。大阪を噫かれさんしても盗み家焼の身ではなし。どうしてなりとも置く分は私心がにある事なり。逢ふに逢はれぬ其の時は此の世ばかりの約束か。さうした例の無いではなし。死ぬるをたかの死出の山三途の川はせく人も。せかる、人もあるまいと氣強う勇む言葉の中。ステテ涙にむせて言ひさせり。地お初重ねて七日といつても明日の事。とても渡す銀なれば早う戻して親方様の。機嫌をも取らんせといへば。調子、さう思うて氣がせくが。其方も知つた彼の

油屋の九平次が。跡の月の晦日たつた二日入る事あり。三日の朝は返さうと一命かけて頼むにより。七日迄は入らぬ銀。兄弟同事の友達のをと思ひて。時貸に貸したるが三日四日に便宜せず。昨日は留守で逢ひもせず。今朝尋ねうと思ひしが。明日限に商の勘定も了はんと得意廻りて打過ぎたり。晩には行つて埒あけう。彼奴も男磨くやつ。俺が難儀も知つて居る。如才はあるまい氣遣ひしやるなヤアお初。初瀬も遠し難波寺。名所多き鐘の聲。つきぬや法の聲ならん。太夫山寺の春の夕暮來て。地見れば先なはコレ九平次。調ア、不出來千萬な。身ども方へは不屈して遊山どころではあるまいぞサア。地今日埒あけうと手を取つて。引留むれば九平次興さめ顔になつて。男の事ぞ徳兵衛。此の連衆は町の衆。上鹽町へ伊勢講にて只今歸るが酒も少し飲んで居る。利腕取つてどうする事ぞ。粗相をするなと笠を取ればイヤ此の徳兵衛は粗相はせぬ。

跡の月の廿八日銀子二貫目時貸に。此の三日限に貸したる銀。地それを返せといふ事と。言はせも果てず九平次かつら〜と笑ひ。圓氣が違つたか徳兵衛。汝と數年語れども一錢借つた覺もなし。地聊爾な事を言ひかけ後悔するなと振放せば。連も笠をはらりと脱ぐ徳兵衛はつと色を變へ。言ふなく九平次。身が此の度大難儀どうもならぬ銀なれども。晦日たつた一日で身代立たぬと歎いた故。日頃語るはこゝらと思ひ男づくで貸したぞよ。手形も入らぬと言つたれば念の爲ちや判をせうと。身どもに證文書かせお主が捺した判がある。さういふな九平次と血眼になつて責めかくる。ム、ウなんぢや判とはどれ見度い。チ、見せいで置かうかと。懐中の鼻紙人より取出し。お町衆なら見知りもあらう。コリヤ地これでも諍ふかと。披いて見すれば九平次横手を打ち。成程判は俺が判。地エ、徳兵衛土に喰ひつき死ぬるとてもこんな事はせぬ物ぢや。此

の九平次は跡の月の廿五日。鼻紙袋を落して印判共に失うた。方々に貼紙して尋ねれども知れぬ故。此の月からコレ。此の御町衆へも斷り印判を變へたわやい。廿五日に落した判を八日に捺されうか。扱は其方が拾うて手形を書いて判を据ゑ。俺を強請つて銀取らうとは謀判より大罪人。地こんな事をせうよりも盗みをせい徳兵衛。エ、首を斬らせる奴なれど懇がひに許して置く。銀になるならして見よと手形を顔へ打付け。はつたと腕む顔付は。權輿も。なけにしらじらし。地徳兵衛くわつと胸せいて大聲あけ。扱巧んだり〜。一杯くうたか無念やな。ハテなんとせう此の銀をのめ〜と只汝に取られうか。斯う巧んだ事なれば出處へ出て俺が負け。腕さきで取つて見せうコレヤイ。地平野屋の徳兵衛ぢや男ぢや合點か。汝かやうに友達を騙つて倒す男ぢやないサア來いと。地搦み付くヤアしやらな丁稚上りめ。投けてくれんと

胸ぐら取り。撲ち合ひ捻ぢ合ひ叩き合ふ。

お初は跳で飛んで下りあれ皆様頼みます。

私が知つたお人ぢやが駕籠の衆は居やらぬ

か。あれ徳様ぢやと身をもがく。フシ詮方な

くも哀れなり。地客はもとより田舎者。怪

我あつてはならぬぞと無體に駕籠に押入る

る。いや先づ待つて下んせなう悲しやと泣

く聲ばかり。急げくと一散に。フシ駕籠を

早めて歸りけり。地徳兵衛は只一人九平次

は五人連。あたりの茶屋より棒づくめ蓮池

迄追出し、誰が噂ひやら叩くやら。フシ更に

わかちは無かりけり。地髪もほどかれ帯も

解け。彼方此方へ伏し轉びやれ九平次め畜

生のめ。汝生けて置かうかと。よろほひ尋ね

廻れども逃けて行方も見えばこそ。其の

儘其處にどうと据り。スエチ大聲あけて涙を流

し。いづれもの手前も面目なし恥かしし。

全く此の徳兵衛が言ひかけしたるで更にな

ければ我等も死なねばならぬ。命代りの金

なれども互の事と役に立ち。地手形を我等

が手で書かせ。印判すゑて其の判を前方に

落せしと。町内へ披露して却つて今の逆ね

だれ。口惜しや無念やな。此の如く踏み叩

かれ男も立たず身も立たず。エ、最前に搦

みつぎ。喰ひついてなりとも死なんものぢ

と大地を叩き齒がみをなし。拳を握り歎き

しは。道理とも笑止ともフシ思ひ。やられて

あはれなり。地ハアかういうても無益の事。

此の徳兵衛が正直の心の底の清しさは二日

を過ぎず大阪中へ申譯はして見せうと。後に

知る。言葉の端いづれも御苦勞かけまし

た。御免あれと一體述べ。破れし編笠拾ひ

被て顔も傾く日影さへ。曇る涙にかきくれ

く。悄悄と歸る有様は目もあてられぬ三重

戀風の。フシ身に鯉川。地流れてはその

虚貝、うつなき。色の闇路を照らせと

鄙人地の思ひ人。小オクリ心へごゝろのわけの

道知るも迷へば知らぬも通ひ。フシ新色里

と賑ははし。地無慚やな天満屋の。お初は内

へ歸りても。今日の事のみ氣にかゝり。スエ

テ酒も飲まれず氣もすまずフシしくく。泣

いて。居る所へ。地隣の妓や傍輩のちよ

つと来てはなう初様。何事も聞かんせぬか。

徳様は何やら譯の悪い事あつて。地たんと

撲たれさんしたと。聞いたが眞かといふも

あり。イヤ私が客様の話ぢやが。踏まれて

死なんしたけなといふもあり。騙をいうて

縛られての。偽判して括られてのと。ろく

な事は一つも言はず。フシ問ふに辛さの見舞

なり。地あゝいやもう言うて下んすな。聞

けば聞く程胸痛み私から先へ死にさうな。

いつそ死んで退け度いと。フシ泣くより外の

事ぞなき。フシ涙片手に。地表を見れば夜の

編笠徳兵衛。思ひ侘びたる忍び姿ちらと

人。庭では下女がやりたいの、フシ目が繁ければさもならず。調ア、いかう氣が盡きた。地門ぢもん見て来うと密みつと出でなう是はどうぞいの。こな様の評判色々に聞いた故。其の氣遣ひさく。氣違ひのやうになつて居たわいのうと。笠の内に顔さし入れ。聲を立てずの隠し泣き、フシあはれ。切なき涙なり。地男も涙にくれながら。調聞きやる通りの巧みなればいふ程俺が非ひに落ちる。地其の内四方八方の首尾はぐわりりと違つて来る。最早今宵は過とされずとんと覺悟を極めた。騒げば内よりも色調世間に悪い取沙汰ある。初椽内へ這入らんせと地聲々に呼び入る、ヲ、くあれぢや何も話されぬ。私がするやうにならんせと。袖裾そですその裾すそに隠し入れオクリ這ふく、中戸なかどの。沓脱くつだより、フシ忍ばせて。地椽の下屋したやにそつと入れ上り口に腰打掛け。煙草引寄せ吸ひつけてフシそしらぬ。顔して居たりけり。地かゝる所へ九平次は悪口仲間あくぐちなま二三人。座頭まじく

らどつと来り。調ヤア妓様達淋しみさうに御座る。なにと客になつて遣らうかい。なんと亭主久しいのと。地のさばり上ればそれ煙草盆お盃と。ありべがかりに立騒ぐ。調イヤく酒は置きや飲んで来た。扱話す事がある。これの初が一客平野屋の徳兵衛めが。身が落した印判拾ひ。二貫目の贗手形いつてがたで騙らうとしたれども。理窟りくつにつまつて擧句には。死なすがひな目に違つて一分は廢つた。向後まごこゝらへ来るとも油断しやるな。皆に斯う語るのも徳兵衛めがうせ貞逆まごさか様に言ふととも。地必ず誠にしやるなや。寄せる事もいらぬもの。どうで野江が飛田とびたものと、誠しやかに言ひ散らす。地椽の下には齒をくひしはり身を顛たふはして腹を立つる。初は之を知らせじと足の先にて押鎮め。抑へ鎮めし神妙しんせうさ亭主は久しい客の事。善惡ぜんあくの返答なく。さらば何ぞお吸物とフシ紛まりかしてぞ立ちにける。地初は涙にくれながら。さのみ利根りねに言はぬもの。調徳様の

御事幾年馴染み心根を明かし明かせし仲なるが。それはそれはいとほけに徹とほ庶しよわけは悪うなし。地頼もしたが身のひして瞞だまされさんしたものなれども。證據なければ理も立たず。此の上は徳様も死なねばならぬ品しななるが。死ぬる覺悟が聞き度いと獨言になぞらへて。足で問へば打領うちりょうき。足首取つて喉笛のどぶえ撫なで。フシ自害じがいするとぞ知らせける。ヲ、其の筈はずく。調いつまで生きても同じ事。地死んで恥はを雪がいではと言へば九平次ぎよつとして。お初は何を言はるぞ。なんの徳兵衛が死ぬるものぞ。若し又死んだら其の跡は。俺が懇ねんしてやらう。其方も俺に惚れてぢやけなと言へば。こりや忝かたじけかろわいの。わしと懇ねんさあんすと此方も殺すが合點か。地徳様に離れて片時かたときも生きて居ようか。調そこな九平次のどうずりめ。阿房口をたたいて人が聞いても不審ふしんが立つ。地どうで徳様一緒に死ぬる私も一緒に死ぬるぞやいのと。足にて突けば椽の下に

は涙を流し。足を取つて押戴き。膝に抱きつ
 きこがれ泣き女も色に包み兼ね。互に物は
 言はねども。肝と肝とにこたへつ、フシしめり
 。泣きにぞ泣き居たる。地人知らぬこそ哀れ
 なれ九平次も氣味悪く。相場が悪いおじやい
 の。こゝな妓家は異な事で、俺等がやうに
 金使ふ大盡は嫌ひさうな。あさやへ寄つて一
 杯してぐわらく一分を撒き散らし。そして
 往んだら寝よからうア、懐が重たうて。
 歩きにくいと悪口だらけ言ひ散らし。フシ喚
 いてこそは歸りけれ。地亭主夫婦今宵はは
 や火もしまへ。泊りの家は寝せませい初も
 二階へ上つて寝や。早う寝やといひければ。
 詞そんなら旦那様内儀様。もうお目にかゝり
 ますまいさらばでござんす。地内衆もさら
 ば／＼と餘所ながら。暇乞して聞に入るこ
 れ一生の別れとは。後にこそ知れ氣もつか
 ぬフシ恐かの心不便さよ。地それ釜の下に
 念を入れ肴を鼠に引かするなど。見世をあ
 けつ門さしつ。寝るより早く高肝オクリ如何



なる。夢も短夜の、フシハつになるのは程もなし。地初は白無垢死出立戀路の闇の黒小袖。上に打ちかけ差足し二階の口より差覗

けば。男は下屋に顔出し招き領き指して。心に物を言はずれば階子の下に下女寝たり

。釣行燈の火は明し如何はせんと案ぜしが。椀欄帯に扇をつけ箱階子の二つ目より。

煽き消せども消え兼ねぬる。身も手も伸しはたと消せば。階子よりどうと落ち行燈

消えて暗がりに。下女はうんと寝がへりし。二人は胸を慄はして、フシ尋ね廻る危さよ。

地亭主奥にて目を覺し。古今のは何ぢや。女子ども有明の火も消えた。地起きてとほせ

と起されて下女はねむそに目をすりく。丸裸にて起き出で火打箱が見えぬと。探り

歩くをさはらじと彼方此方へ這ひまつはる玉藁。苦しき闇の現なややうやう二人手

を取合ひ。門口迄そつと出で鏡は外せしが。車戸の音いぶかしく明け兼ねし折柄。下

女は火打をはたくと。打つ音に紛らかし

丁ど打てばそつと明け。かちく打てばそろくく明け。合せくつて身を締め袖とく

を横の戸や。虎の尾を踏む心地して。二人細いてつつと出で。顔を見合せア、嬉しと

死に行く身を喜びし。哀れさ辛さあさまし

さ。跡に火打の石の火の命の。末こそ三

短かけれ。

徳兵衛 道行 おぼつ

フシ 此の世の名残。夜も名残。死に行く身を警ふればスエテ仇しが原の道の箱。一足

づつに消えて行く。夢の夢こそフシあはれなれ。ワキあれ数ふれば曉の。七つの時

が六つ鳴りて残る一つが今生の。鐘の響きの聞きをさめ。木夫寂滅爲樂と響くなり。

鐘ばかりかは。草も木も空も名残と見あぐれば。雲心なき水の音北斗は冴えて影うつ

る星の妹背の天の河。梅田の橋を鶺鴒の橋と契りていつ迄も。われとそなたは女夫星。

地必ずさうと縋りより。二人が中に降る涙

フシ 河の水嵩も増さるべし。ハルフシ向の二

階は。何屋とも。おほつかなきけ最中にて。まだ寝ぬ火影聲たかく。オドリ今年の心中よ

しあしの。言の葉草や。しけるらん。木夫地聞くに心もくれはどりあやなや昨日今日迄

も。よそに言ひしが明日よりは我も噂の數

に入。世にうたはれん諺はば諺へ。フシ諺

ふを聞けば。歌入どうで女房にや持ちやさんすまい。いらぬものぢやと思へども。木夫

夏の夜のならひ。命を追はゆる鶏の聲明け
なば愛しや天神の森で死なんと手を引い
てオクリ梅田の小屋鳥の明日は我が身
を餌食ぞや。夫夫誠今年はこな様も二十五
歳の厄の年。わしも十九の厄年とて。思ひ
合うたる厄栗り縁の深さのフシしるしかや。

細神や佛にかけ置きし現世の願を今こゝで。
未來へ回向し後の世も猶しも一つ蓮ぞやと。
爪繰る數珠の百八にステテ涙の玉の數そひ
て盡きせぬあはれ盡きる道。ニ人 心も空に
。かけくらく風しんくたる會根崎のフシ

森にぞ。たどり着きにける。夫夫地彼處にか
此處にかと拂へど草に散る露の我より先に
先づ消えて。定めなき世は稻妻かオクリそれ
か。あらぬかア、怖。今のは何といふもの
やらん。間ヲ、あれこそは人魂よ。今宵死
するは我のみとこそ思ひしに。先立つ人も
ありしよな。地誰にもせよ死出の山の伴ひ
ぞや。南無阿彌陀佛。地南無阿彌陀佛の聲

の中。あはれ悲しや又こそ魂の世を去りし

わ南無阿彌陀佛といひければ。女はおろか
に涙ぐみ。今宵は人の死ぬる夜かやあさま
しさよと涙ぐむ。男涙をはらはらと流し。
間二つ連れ飛ぶ人魂を餘所の上と思ふかや。
正しう御身と我が魂よ。地なになう二人の
魂とや。はや我々は死したる身か。ヲ、
常ならば結びとめ繋ぎとめんと歎かまし。

今は最期を急ぐ身の魂のありかを一つに栖
まん。道を迷ふな違ふなと。抱き寄せ肌を
寄せステテかつぱと伏して。泣き居たる。フ
と一人の心ぞ。不便なる。涙の糸の結び松
機櫛の一本の相生を。連理の契になぞらへ
露の憂き身の置きどころ。サア此處に極め
んと。上着の帯を徳兵衛も初も涙の染小袖

。脱いでかけたる機櫛の葉のオクリその玉
帯今ぞけに。フシ憂き世の塵を。地拂ふらん
初が袖より剃刀出し。若しも道にて追手の
かゝり別れくゝになるとても。浮名は捨て
じと心がけ剃刀用意致せしが。望の通り一
所で死ぬるこの嬉しさといひければ。間ヲ

所で死ぬるこの嬉しさといひければ。

ヲ神妙頼もしし。さほどに心落着くからは
最期も案ずる事はなし。さりながら今はの
時の苦患にて。死姿見苦しいはれんも口
惜しし。地此の二本の連理の木に身體をき
つと結びつけ。涙う死ぬまいか世に類なき
死様の。手本ならん如何にもとあさまし
や淺黄染。か、れとてやは抱へ帶兩方へ引
張りて。剃刀取つてさらくゝと。帯は裂け
ても主様と私が間はよも裂けじと。どうど
座を組み二重三重ゆるがぬやうにしつかと
締め。間ようしまつたか。ヲ、しめました
と。地女は夫の姿を見男は女の體を見て。

こは情なき身の果ぞやとステテわつと泣き入
る。ばかりなり。ア、歎かじと徳兵衛。
顔振上げて手を合せ。我幼少にて誠の父母
に離れ。叔父といひ親方の苦勞となりて人
となり。恩も送らず此の儘に。なき跡まで
も兎や角と。御難儀かけん。フシ勿體なや。
罪を許して下さいか。其途にまします父母
には。追付け御目にかゝるべしステテ迎へ給

罪を許して下さいか。其途にまします父母

には。追付け御目にかゝるべしステテ迎へ給

へと泣きければ。お初も同じく手を合せ。
こな様は羨しや冥途の親御にあはんとある
我等が父様母様はまめで此の世の人なれば
。いつ逢ふ事のあるべきぞ便りは此の春聞
いたれど、逢うたは去年の初秋の初が心中
取沙汰の。明日は在所へ聞えなば如何ばかり
かば歎きをかけん。親たちへも兄弟へも
これから此の世の暇乞。せめて心が通じな
は夢にも見えてくれよかし。懐しの母
様や名残惜しの父様やと。しやくり上げ
く。スシ聲も。惜まず泣きければ。夫も
わつと叫び入り。流涕こがる、心いき
シ理せめてあはれなれ。地いつ迄言うて
詮もなし。はやく殺して殺してと最期
を急げば心得たりと。脇差するりと抜放し
。サア只今ぞ南無阿彌陀ノと。いへども
流石此の年月いとし可愛としめて寢し。肌
に刃が當てられうかと。眼も眩み手もふる
ひ。弱る心を引直し。取直してもなほ慄
ひ突くとはずれど切先は。彼方へ外れ此

方へそれ。一三度閃く劍の刃。あつとは
かりに喉尻に。ぐつと通るか南無阿彌陀
。く南無阿彌陀佛と。くり通しくり通す
腕先も。弱るを見れば兩手をのべ。斷末魔
の四苦八苦。オクリあはれといふも餘りあ
り。我とても後れうか息は一度に引取らん
と。剃刀取つて咽喉につき立て。柄も折れ
よ刃も碎けとゑぐり。くりくり目もくるめ
き。苦しむ息も曉のフシ知死期につれて絶え
果てたり。地ツメ誰が告ぐるとは曾根崎の森
の下風音に聞え。とり傳へ貴賤群集の回向
の種。未來成佛疑ひ無き戀の。手本となり
にけり。

右之本令吟覽頌句音節墨譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

竹 本 義 太 夫

重而予以著述之本令校合候
畢全可爲正本者歟

近 松 門 左 衛 門

京二條通寺町西江入町

正木屋 山 本 九 兵 衛 版